

# 自然法爾の祈り

## ～神事にとらわれない自然な生き方～

2010年6月20日 於：神奈川集會

### 神示にとらわれるな

個人の自由な意見を権力で封殺したり、思想や主義を一方向的に押しつけるということは、もう時代遅れのやり方で、日本の政府も国民に対してそのようなことはできませんし、マスコミの情報を操作して権力を維持しようという気持ちも政府にはありません。公務員でも思想の自由がありますし、まともな会社ならば、会社の社長も部長も社員の思想を束縛することはありません。

このような今の時代に、宗教団体であっても、何から何までトップダウン式に、「こうしなさい、こうしなければいけない」と会員に様々な行を押しつけることは、会員を馬鹿にしたやり方で、もはや時代遅れのやり方なのです。自由に生きることを教えるべき宗教団体が会員の自由を束縛することはあってはならないことです。宗教団体だからこそ、より自由に生きることを人々に教えるべきなのです。

さてここで問題になることは、「神示」ということです。

人間からの命令ならば、常識に反することや自分にできそうもないことはやらないのですが、「神示」という形で、神様から「こうしなさい」と言われると、信者としては弱いのです。神様からの絶対的な命令ならば、神様を信仰する立場の自分たちはやらないわけにはいきません。この理由から、心から納得しなくても、多少無理なことであっても、自分の反発する気持ちを抑えたり、自分を騙してでも、「神示」を実行しようと努力するわけです。そうすることによって、自己の信仰心を満足させるわけです。

しかし、ここで知らなければならないことは、「神示」と言いましても、本物と偽物がありまして、実際には「偽物の神示が多い」ということです。

「神示」というのは、そう度々あるものではありません。「私には霊能力があって、守護神の声を聞くことができますのです。私の神示を聞いた人は、みな恐れ入って聞いています。私の守護神が森島さんについてこれこれしかじかと伝えてきた。どうです？ 見事に当たっているでしょう？」と、私に偉そうに言ってきた人がいました。「それは間違っています。それは守護神の声ではありません。あなたの潜在意識にある、こうであってほしいという想念が、あたかも守護神が言っているかのように聞こえてくるのです。真実の霊能力がないのに、霊能力があるふりをして、人に崇め奉られたいというつまらない欲望でそんなことを言っていて歩いて、見る人が見れば嘘だと分かってしまうのですから、恥をかかなくてはいけません。人の心を覗いて見るような当てもの屋になっては本心開発が遅れます。そんな暇があったら、人々の幸せを祈り、世界平和の祈りを祈ったらどうでしょうか？」と私

がはっきり言いませしたら、相手の人はカンカンに怒って去って行きました。

皆さんの中には、神様の姿を見たり声を聞いたりして教え導いてもらいたい人がかなりいると思います。ところが、真実そうなるためには、その人の心境がよほどすぐれてきていないと非常に危険な状態に陥ることがあり、かえって自己の運命を損ない、他人の運命をも傷つけてしまうことが多々あるのです。その人の潜在意識が、神霊の心のような状態で、声で、いろいろなことをその人に教えたり命令したりすることが多いのです。それが真実の神霊の声と入り混じって聞こえてくるので、その判断をすることが実に難しいのです。神示といっても、ほとんどが自己の潜在意識であつたりするのです。

一人の人を判断するのも、潜在意識がその人に悪意を持っていれば、その人が事実上立派な人であっても、そのお告げは「あの人は悪い人である」というように出てまいります。また、実際にはやらなくてはならぬことでも、潜在意識でやりたくない場合には、「やらなくともよい」という命令になります。それが自分だけの生き方であるのならば、損をしても自分だけのことですが、これを他人の指導に用いた場合には、他人の運命を狂わせることになってしまいます。

やたらに神の声を書きたがることは無謀なのであります。守護の神霊は、守っていることをいちいち声で聞かせて知らせるようなことはいたしません。肉体人間の何気ない一挙手一投足の間にその使命を遂行してゆくのであります。たとえば「その人に会った方がよい」という有益な人には何気なく会わせたり、知らないうちに傷害や過ちを防いでくれたり、日常生活の中の一音が相手の運命を開く言葉になったり、あらゆる面で、目に見えないところから、守護霊守護神は肉体人間を守ってくれているのです。ですから、声でささやかれたり、目で見たりする必要は毛頭ないのです。目で見たり声に聞いたりすると、かえってそのことに把われて、潜在意識で自他の運命を危うくしてしまうことがあるのです。ただ常に為さねばならぬことは守護霊守護神への感謝なのであります。

五井先生が伝えている大神様からの神示は、「世界平和の祈りは、地球を救う唯一無二の方法である。世界平和の祈りを祈るところに救世の大光明を輝かすから、世界平和の祈りをしなさい。世界平和の祈りを祈っていれば、地球は滅亡することなく、必ず完全平和を実現できる」という神示です。

「世界は平和になる」という神示以上の大きな神示はどこにもありません。「世界は平和になる」ということは、「あなたも幸せになり、あなたの家族も幸せになる」ということです。この神示さえ知れば、もうこれ以上、何も神示はいらないではありませんか。「世界は平和になる」のですから、「今日は右に行きなさい」とか「明日はこうしなさい」という細々とした神示は一切必要ないのです。あなたがどこへ行こうと、あなたが何をしようと、何をしようとしなくても、世界は平和になるに決まっているのです。そこで、「消えてゆく姿で世界平和の祈り」を真似て、「世界は平和になる信念で世界平和の祈り」と

私は説いているのです。

それでは、もし神様から声が聞こえてきたり、神示を聞いたら、その時にはどうしたらよいのでしょうか？ その時は、五井先生の「消えてゆく姿」の教えを思い出して下さい。その神様が、仏菩薩であろうと、宇宙人であろうと、宇宙神であろうと、五井先生のお姿であっても、すべての神示を一度「消えてゆく姿」にしてしまうのです。

参考までに五井先生からお聞きしたお話を例にして具体的に書いておきましょう。

宇宙神「あなたもお金がなくて困るだろうから、金を与える。これから浜松町駅で降りて、その降りた右側に四十位の女性が宝くじを売っているから、その人から××××番の宝くじを買いなさい」

あなた「これは消えてゆく姿だ。世界人類が平和でありますように」

宇宙神「いま目の前の広い道路にはたくさんの車が猛スピードで行き交っているが、神はあなたを守っているから、神の無限なる力を信じて、安心して、目を閉じて向こう側まで歩きなさい」

あなた「これは消えてゆく姿だ。世界人類が平和でありますように」

宇宙神「あなたは神より選ばれた偉大な人間だ。今まで誰にもできなかった大菩薩の仕事をするのだ」

あなた「これは消えてゆく姿だ。世界人類が平和でありますように」

宇宙神「あなたの願いをすべてかなえてあげよう。あなたの願いを強くイメージしなさい」

あなた「これは消えてゆく姿だ。世界人類が平和でありますように」

宇宙神「あなたは役立たずで、もう使い物にならないから、世界平和の祈りもやめなさい」

あなた「これは消えてゆく姿だ。世界人類が平和でありますように」

宇宙神「今は時代が進んだので、世界平和の祈りよりももっと素晴らしい方法があるのだ」

あなた「これは消えてゆく姿だ。世界人類が平和でありますように」

このように、すべての神の声を「消えてゆく姿」にして、「世界人類が平和でありますように」の祈りの中に入れてしまうのです。そうしますと、偽物の神示はすべてきれいに消え去ってしまいます。本物の神示である場合には、否定しても自然と行為となって現れてきますから、心配はいりません。本物か偽物かは判断がつかかねるのですから、一度すべてを「消えてゆく姿」として否定してしまうことです。神示を「すべて本物である」と鵜呑みにして、「消えてゆく姿」と否定しないでその神示を実行することは、非常に危険ですし、神の子としての自分の尊厳を失う無批判無判断の隷属した立場に立ってはい、いつまでもたっても神の子の神性は現れてまいりません。「消えてゆく姿」と否定し、「世界人類が平和でありますように」の祈りの中に入れる日まで、いつまでも神の試みは続けられるのです。

しかし、皆さんは何も不安にならなくても大丈夫です。「世界平和の祈り」だけをやっておけば大丈夫なのです。安心して下さい。真理の言葉に把われず、神示に把われず、因縁因果に把われず、想念の法則（心の法則）に把われず、念力に把われず、現世利益に把われず、光に把われず、闇にも把われず、すべてを消えてゆく姿として「世界平和の祈り」の中に投げ入れてしまうことです。「世界平和の祈りに把われてはいけない」と言う人がいますが、「形に把われてはいけない」という言葉はあっても、「世界平和の祈りに把われてはいけない」という言葉は、五井先生の教えの中にはどこにもありません。安心して「世界平和の祈り」に統一して下さい。

「世界平和の祈り」を祈っていさえすれば、「ああしよう、こうしよう」「こうしなければならぬ、ああしてはいけない」といちいち思わなくても、神のみ心が自然法爾のうちにあなたの行為となって現れてくるのであります。

### 自然に生きよう～「無為にして為す」（老子）が最高の生き方～

唯一会のホームページの解説や過去ログを初めからお読みになっている方はすでにご存じのことと思いますが、私は白光真宏会の維持会員であります。現在の白光真宏会の指導方針に対して全面的に納得し従っているわけではありません。詳しいことは唯一会のホームページの『教義の基本』などに書いてありますから、ここでは簡単に言いますと、現在の白光真宏会においては、創始者の五井先生の教義に二代目の昌美先生の教義が新たに付け加えられておりますが、私は昌美先生の説かれる教義や行法は一つもやらずに、初代の五井先生のお説きになった教義と行法だけを行じているのです。すなわち、昔も今も相変わらずに、私は「世界平和の祈り」だけを祈り、五井先生から教えられた如来印だけを行じているのです。昌美先生が教えられている「光明思想徹底行」「非光明思想消滅行」「地球世界感謝行」「我即神也・人即神也・人類即神也の宣言と印」「願望成就宣言法」などは一切やっておりません。昌美先生の教義は、すべて五井先生の教えから外れた自力的教えと解釈しているのです。

私がこう話しますと、昌美先生を信じている人は私を嫌って離れてゆきますが、宗教の道を説く立場に立ちますと、間違っていることを「正しい」とは言えません。昌美先生は個人的には素晴らしい人ですし、何も申し分のない愛すべき人です。しかし、宗教指導者としての昌美先生に対しては、「五井先生の教えに外れている」とはっきりと言わざるを得ないのです。

昌美先生の「光明思想徹底行」は、最近はやりの積極思想と同じであり、不自然な思想であって、自然に光明心を現す五井先生の「自然光明思想」ではありません。昌美先生の「我即神也・人即神也・人類即神也の宣言と印」は、五井先生が「やってはいけない」と何度も戒めた生長の家のやり方と同一であり、真理に把われた教義であり行法であるのです。

「良いとか悪いとか批判せずに、ただ昌美先生に言われたことを素直にやりさえすればよいのだ」と言う会員の方がいますが、それは「昌美先生の説くことが絶対に正しいに決まっている」という前提で発言しているのもであって、その人はその人でお好きなようになさったらよろしいでしょう。但し、誤った教えを無批判で行じておきますと、誤った教えの変な癖がついてしましまして、その癖を取るのに後で大変な苦勞をしなければなりません。ですから、何も批判せずに、何も考えずに行じるのではなく、五井先生の教えを正しく学びとり、正しく理解した上で行じた方が遠回りをせずに済むのです。

現在は、私が五井先生の代わりとして、「世界平和の祈りが一番いいんだ！ 世界平和の祈りよりもよい行法などはないんだ！」と説いているのですから、嘘と思ってもいいから、一度は私の法話を読んでみて、それでも「森島先生の言うことよりも昌美先生の教えを信じる」と言うなら、それはそれで仕方ないと思います。その人には、私の教えを理解できる時期がまだ来ていないのでしょう。

さて印というのは、静止印と動作印の二つがありまして、座禅で使われる禅定印の他、阿弥陀定印、来迎印、智拳印、施無畏印、与願印などの静止印と、真言密教やチベット仏教に伝えられている動作印があります。

「我即神也」については、宣言の言葉と動作印をまず分けて考えねばなりません。

「我即神也」とは、「私は神である」という意味です。人間は「本来は」神の子であり、「本来は」神そのものといっても間違いではありませんが、現在の人間はとても神の子とは呼べない心境であり、「私は神の子である」と大見得を切って宣言できるほど人類はまだまだ光明化してはいないのです。

今の段階で「私は神の子である」と言えば、それは嘘になってしまいます。神というのは完全ということですから、「私は神である」と宣言することは、「私は完全である」と宣言することです。しかし、現実には完全ではないのですから、嘘をつく想いがたまってゆき、かえって鼻持ちならぬ嫌味をまき散らす偽善者となってしまうのです。神になるどころか、かえって神性顕現から遠ざかってしまうのです。ここが真理の言葉を扱うのに非常に難しいところなのです。

そこで五井先生は、真理としては「人間は本来、神の分霊である」と教えた上で、その真理を現すための具体的な行法としては、「私は神である」「あなたは神である」「人類は神である」と宣言する行法を採用せずに、守護の神霊に神性を開発していただく他力の祈りを勧められたのです。そして、「世界平和の祈り」を祈ってさえいれば、無理に「私は神である」と宣言しなくても、無理に嘘をつかなくても、自然に人類は神の子として神性を顕現してゆくのだと教えたのです。

また、動作印について申しますと、「この動作印をすればこのような効果がある」というようなものではなく、意識して手を動かすものではなく、無意識に手を動かした動作印

が本物なのです。日本舞踊の振り付けのように、定型の印があるわけではないのです。神のみ心にとって必要があれば、無意識のうちに、「印を組もう」と思わなくても自然に動作となって現れるものであり、必要がなければ現れないのです。それを意識して印を組もうとしますと自力行になってしまうのです。

五井先生の教えは、何度も申しますが、自力行ではなくて他力行なのです。他力行とは、守護の神霊に全託することです。その具体的な方法として、「世界平和の祈り」に全託することを教えているのです。「世界平和の祈り」を祈っていて、もし神のみ心にとって必要ならば自然に動作印が現れるでしょう。神のみ心にとって必要なければ静止印のままでいることでしょう。どちらにしても、肉体頭脳で「このように印を組もう」という必要はまったくないのです。意識的に組んだ動作印は、「印をこのように組もう」という想念がそこにはあるのですから、すでに無為の境地ではなく、本物ではないのです。無為にして印を組む。これが本物なのです。

以上の理由で、私は「我即神也・人即神也・人類即神也」の宣言をせず、それに伴う印も組まないのです。お分かりでしょうか。神智から現れた「世界平和の祈り」に比べれば、肉体頭脳で考え出された「我即神也」の宣言や印などは下の下の下の低い教えなのです。

「世界平和の祈りは我即神也に至るプロセスなのです」と昌美先生は説かれますが、私はそのお言葉に同意できません。「我即神也の宣言と印は、世界平和の祈りを真実に皆さんが理解するまでのプロセスである」と私は言うのです。私はその真実を知っているので、初めから「我即神也」などの行は一切やらないのです。この私の主張を理解できる人は現在ごくわずかの人しかおりませんが、いずれは、すべての人が「世界平和の祈りこそが究極の祈りだった」と、五井先生の教えを驚きの目をもって改めて見直す日がくるのです。

無為にして為す。為さずして成る。

## 「世界平和の祈り」こそが最高の祈りであり最高の行

インターネットのホームページは、見たい人が見ればよく、見たくない人は見なくともよいのですから、押しつけがましさがなく、見る側が見たいものを自由に選択できるところがいいと思います。車でもパソコンでも、ユーザー側で自由に好きなものを選択できるということが大事であるように、宗教でも信仰の生き方については、会が画一的に「こうしなさい」とトップダウン式に軍隊のように信者に押しつけるのではなく、信者が自分の自由な意志で自分の生き方を選択できる自由な環境が必要なのです。

デパートに行ったとき、地下の食料品売り場から屋上まですべての商品を見て回り、すべての商品を買う必要はありません。「これはいかがですか？」と店員から次々と勧めら

れるネクタイや香水をすべて買う必要もありません。自分の気に入った物を自分に必要なだけ買えばよろしいのです。それと同じように、一つの宗教団体の中の教えでも、「この行法もあります。あの行法もあります」とたくさんの行法を教えられても、無理にすべての行法をやる必要はないのです。それで「あなたは信仰心が足りない」と責めてくる人もいますが、責める人の方が誤りなのですから、いずれ消えてゆきます。

「世界平和の祈り」は最高の祈りであり、最高の行法であると思います。そう信じている私にとりましては、「世界平和の祈り」以外の行法には少しも興味がありません。

「世界平和の祈り」を祈り続けてゆけば、守護の神霊と一体化して、私たちは真実に幸せになれるのです。私たちは神性を開発できるのです。私たちは世界を平和にすることができるのです。「世界平和の祈り」は一つの欠陥もない、ただ一つの完全な祈りであり、完璧な行法であるのです。それに対して、「世界平和の祈り」以外の祈りや行法には、どこかに欠陥というものが潜んでいるのです。完全な行法は「世界平和の祈り」だけなのです。

私の背後にいる神霊は、「世界平和の祈りは最高の祈りである」と、この一言だけを力強く繰り返し私に伝えてくるのです。

皆さんは、この世の損得をあまり計算しすぎてはいけません。この人についての方が得だろうとか、あの人についてら損だろうとか、損得を計算しておりますと、神霊から流れてくる神智の直観力を妨げてしまい、業想念に惑わされてしまうのです。たとえば「この人とこの人のどちらと結婚したらよろしいでしょうか？」というような質問を受ける時がありますが、「この人と結婚した場合には、将来はこのくらいの収入で、この程度の暮らしができて、あちらの人と結婚したらこの程度の暮らしだろうから、こちらの人がいいかな」と、あまりにも損得を計算しすぎてしまいますと、直観力が鈍ってしまい、神智の正しい判断ができなくなるときがあるのです。

私は最初たった一人だけで「世界平和の祈りは最高の祈りである」と唱え始め、白光真宏会の会長にも理事長にも訴えたのですが、残念ながら聞き入れてもらえず、仕方なく「世界平和の祈りは最高であると信じる唯一会」を私一人で創ったのでした。常識からいえば、こんな私の行為は損な行為と見えることでしょう。しかし、私はそうしたこの世の損得を計算せずに、自分の直観力を信じて行動したのです。その結果、それまでは人々の上に立って指導するつもりはまったくなかったのに、「世界平和の祈り」の中心者として働くという思いがけない天命を神様から授けられたのです。ですから、熟慮して祈って、また熟慮して祈っても、どうしても「自分の意見の方が正しい」と直観的に判断したら、数万人と意見が異なっても、自分の直観力を信じて、自分の思う通りに実行したらよいのです。

私はただ「世界平和の祈り」を祈っていればよいのですから、ほんとうに気楽な立場です。もし私の考えに賛同する方々がいるならば、次第に私のもとに集まってくることでしょう。もし私の考えに賛同する人が現れなければ、私は一人であの世に行くことでしょう。

真理を知っている私にとっては、どちらでも構いません。また、私の心の中には、「将来はこうしよう」とか特別に予定していることは一つもありません。「世界人類が平和でありますように」とただひたすら祈っているだけで、何も思いがないのです。直観的に、守護の神霊の導くままに私は実行しているのです。守護の神霊に全託した後の心境は、安心立命した自然法爾の境地になるのです。

#### ◇参考1：親鸞八十八歳御筆（ごひち）

親鸞聖人が八十八歳の時に書いた「自然法爾」についての美しい文章を、参考までにここに載せておきましょう。

《 自然（じねん）といふは、自（じ）はおのづからといふ。行者のはからひにあらず、しからしむといふことばなり。然（ねん）といふは、しからしむといふことば。行者のはからひにあらず。如来のちかひにてあるがゆへに。

法爾（ほふに）といふは、如来の御（おん）ちかひなるがゆへに、しからしむるを法爾といふ。この法爾は、御（おん）ちかひなりけるゆへに、すべて行者のはからひなきをもちて、このゆへに他力（たりき）には義（ぎ）なきを義とすと、しるべきなり。

自然（じねん）といふは、もとより、しからしむるといふことばなり。彌陀仏（みだぶつ）の御（おん）ちかひのもとより行者のはからひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひてむかへんと、はからせたまひたるによりて、行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然（じねん）とはまふすぞときゝてさふろふ。……》

（古語のまま、句読点は筆者）

現代語訳：

《 自然の自はおのづからということであります。人の側のはからいではありません。然とはそのようにさせるという言葉であります。そのようにさせるというのは、人の側のはからいではありません。それは如来のお誓いでありますから、法爾といひます。

法爾というのは如来のお誓いでありますから、だからそのようにさせるということをそのまま法爾というのであります。また法爾である如来のお誓いの徳につつまれるために、およそ人のはからいはなくなりますから、これをそのようにさせるといひます。これがわかかってはじめて、すべての人ははからわなくなるのであります。ですから義の捨てられていることが義である、と知らねばならないといわれます。

言葉をかえていひますと、自然というのは、元来そのようにさせるという言葉であります。阿弥陀仏のお誓いはもともと、人がはからいを離れて南無阿弥陀仏と、仏をたのみたてまつるとき、これを迎えいれようとおはからいになったのですから、人がみずからはからいを捨てて、善いとも悪いともはからわないことを自然というのである、と聞いています。……》



(日本の名著6巻『親鸞』＝「消息集(末燈鈔・自然法爾章)」＝中央公論社、  
改行は引用者)

◇参考2：念仏は易きが故に一切に通ず～法然著『選択本願念仏集』より～

法然上人は、易行道と難行道の違いを説いた上で、「念仏がすべての民衆にとって救われの道である」ことを懇切丁寧に説いております。古文ではありますが、内容はそう難しくはない文なので、法然の書いた『選択(せんちやく)本願念仏集』より、「念仏は易きが故に一切に通ず」と説いている箇所を紹介しましょう。法蔵比丘がなぜ「称名念仏の一行」のみを本願としたのかが詳しく説明されています。いつも申しておりますように、「世界平和の祈り」は念仏と同じ他力易行道であり、自力難行道ではないのです。

《念仏は易きが故に一切に通ず。諸行は難きが故に諸機に通ぜず。しかれば則ち一切衆生をして平等に往生せしめむがために、難(なん)を捨て、易(い)を取りて、本願としたまふか。

もしそれ造像起塔(ぞうぞうきとう)をもって本願とせば、貧窮困乏(びんぐうこんぼう)の類(たぐい)は定(さだ)んで往生の望(のぞみ)を絶たむ。しかも富貴(ふき)の者は少なく、貧賤(ひんせん)の者は甚だ多し。

もし智慧高才(ちえこうさい)をもって本願とせば、愚鈍下智(ぐどんげち)の者は定んで往生の望を絶たむ。しかも智慧の者は少なく、愚痴(ぐち)の者は甚だ多し。

もし多聞多見(たもんたけん)をもって本願とせば、少聞少見(しょうもんしょうけん)の輩(ともがら)は定んで往生の望を絶たむ。しかも多聞の者は少なく、少聞の者は甚だ多し。

もし持戒持律(じかいじりつ)をもって本願とせば、破戒無戒(はかいむかい)の人は定んで往生の望は絶たむ。しかも持戒の者は少なく、破戒の者は甚だ多し。

自余の諸行、これに准(じゅん)じてまさに知るべし。

まさに知るべし。上(かみ)の諸行等をもって本願とせば、往生を得る者は少なく、往生せざる者は多からむ。

しかれば則ち、彌陀如来、法蔵比丘(ほうぞうびく)の昔、平等の慈悲に催(もよお)されて、普(あまね)く一切を撰(しょう)せむがために、造像起塔の諸行をもって、往生の本願としたまわず。ただ称名念仏の一行(いちぎょう)をもって、その本願としたまへるなり。》

(古語のまま、句読点は一般の注釈に従う)

現代語訳：

《念仏は容易であるから、どんな人にもできるが、ほかの行為は行なうのに困難であるから、あらゆる人の能力に応ずることができない。それであるから、一切の生きとし生

けるものを平等に往生させようとするためには、困難なものを捨て、容易な行為を取って、仏の本願とされたのであろうか。

もしも、堂塔を建立し、仏像を造ることによって本願とされると、貧しく賤しい者たちは往生する望みが完全に絶たれたことになる。しかも、裕福な者は少ないのに、貧しく賤しい者は非常に多い。

もしも、智慧や才能のすぐれた者をもって、本願の対象とされるならば、愚かな智慧のない者は往生する望みが完全に絶たれたことになる。しかも、智慧のある者は少なく、愚かな者は非常に多い。

もしも、よく見、聞いて学問をしている者をもって、本願の対象とされるならば、わずかしか見聞きしないで、学問をあまりしていない者たちは、往生する望みが完全に絶たれたことになる。しかも、よく聞いて学問している者は少なく、学問のない者は非常に多い。

もしも、戒律を堅持している者をもって本願の対象とされるならば、破戒や無戒の人は往生する望みが完全に絶たれたことになる。しかも、持戒の者は少なく、破戒の者は非常に多い。

それ以外の行為をする者もこれに準じて理解することができよう。

当然これで理解できたであろうが、以上の多くの行為をもって、本願されるなならば、往生できる者は少なく、往生しない者は多いことであろう。

それであるから、阿弥陀如来が法蔵比丘であられたはるか昔に、あらゆる人びとに平等の慈悲をおこして、あまねく一切を撰（おさ）め入れるために、仏像を造り、堂塔を建立するなどの多くの行為をもって往生の本願とはされなかった。ただ称名念仏の一行のみをもって本願とされたのである。》

（日本の名著5巻『法然』中央公論社、改行は引用者）